

(始良郡溝辺町崎森東原)

位置と環境

溝辺町は、鹿児島湾奥部の西側にあたり、地形は大半がシラス台地である。シラス台地は標高250～270mの火山灰台地である。溝辺町の中心は町の西部にあるが、隼人町に接する東部には鹿児島空港が建設されている。遺跡は、鹿児島空港より南に3kmの位置にある。

遺跡の立地は標高235mの舌状台地で、周りが雨などで浸食されシラスの崖になっている。その崖下には湧水もみられる。

調査の経緯

九州縦貫道建設に伴う県教育委員会の発掘調査で発見された。発掘調査は昭和49年9月から昭和50年1月の間実施された。

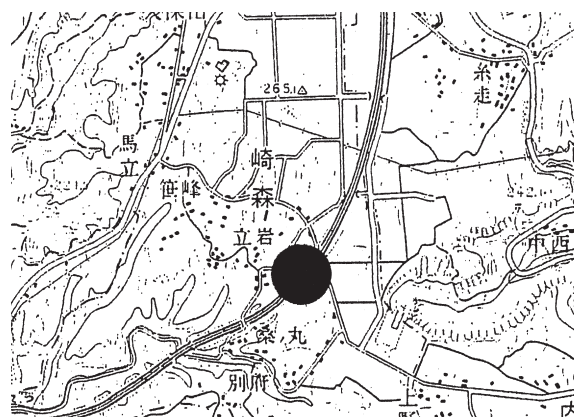
遺構と遺物

層序は、第1層が耕作土、第2層が黒色火山灰層、第3層が黄褐色火山灰層、第4層が灰褐色粘質火山灰層、第5層が黒褐色粘質火山灰層、第6層が黄色軽石層、第7層が極暗赤褐色火山灰層、第8層がシラス層である。包含層は、第2・3層に古墳時代の遺物が、第4・5層に縄文時代早期がみられた。

遺構は、第3層に掘り込まれた状態で方形の竪穴住居跡が1軒検出された。規模は4.5×4.9mで深さは10cmである。支柱は6本で構成し、四隅の外側に柱跡がみられる家の構造である。中央には炉跡を含む落ち込みがあり、南には深さ30cmの方形の土坑がみられる。この住居跡は、昭和40年代後半の頃の住居跡としては画期的発見であった。

遺物は、甕形土器、高坏、埴等がセットで出土しセット関係で把握できた。また、この層からは縄文時代中期の阿高式土器と晩期の黒川式土器が出土している。

第4・5層からは、石坂式土器と完形の条痕文土器が出土している。これらの石坂式土器は多種の文様がみられ、器形も様々である。また、条痕文土器の底部は網代底である。



第1図 東原遺跡の位置

特徴

昭和40年代の末頃は、南九州の弥生時代と古墳時代の概念が変わりつつあり、それまで、弥生時代に位置付けられていた成川式土器についても、古墳時代の範疇に入るのではないかと考えられてきた。その中で本遺跡の住居跡から出土した一括土器は、セット関係などから古墳時代のもものと判断できるものである。本遺跡は後に古墳時代の東原式土器とされる土器群の標識遺跡となるものである。

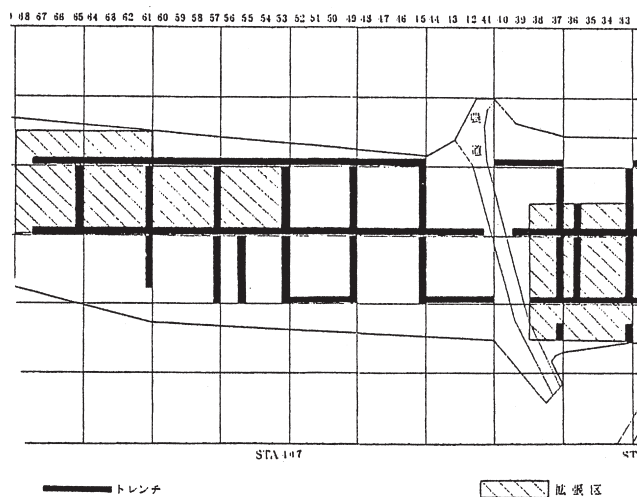
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

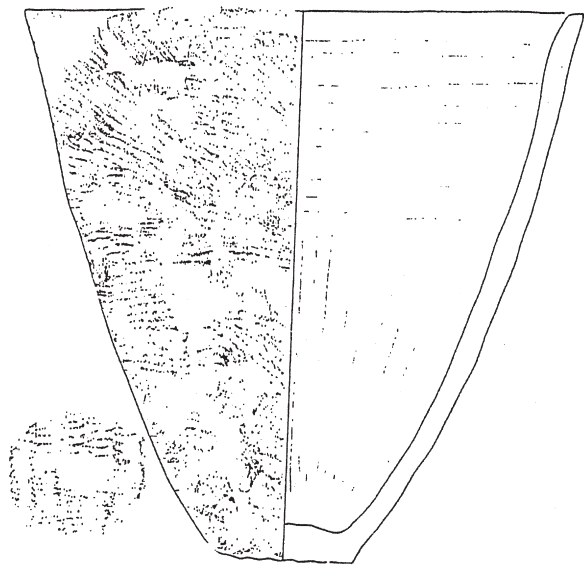
参考文献

鹿児島県教育委員会 1978「東原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』10

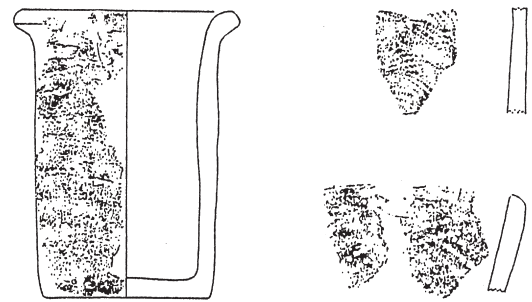
(彌榮久志)



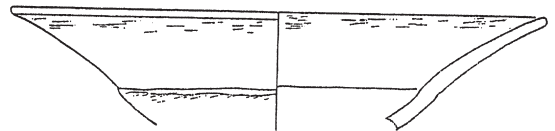
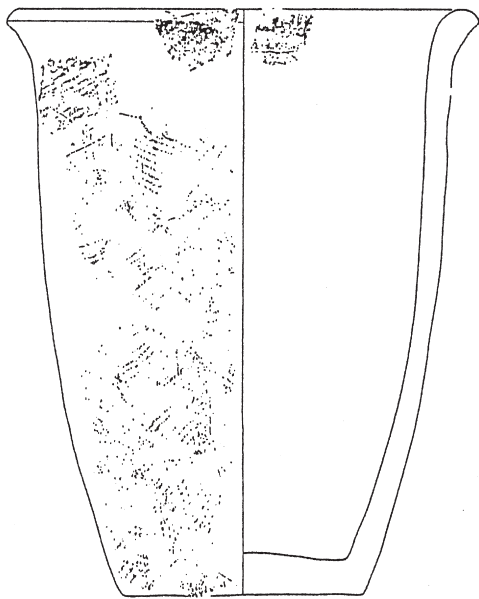
第2図 グリッド・トレンチ及び発掘調査区図



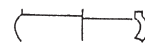
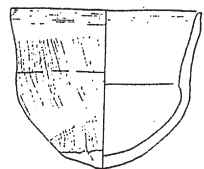
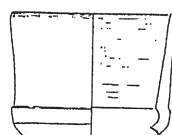
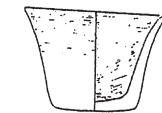
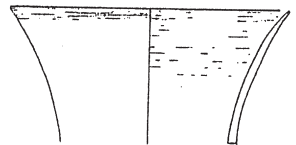
条痕土器



石坂式土器

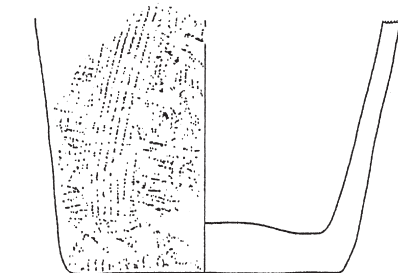
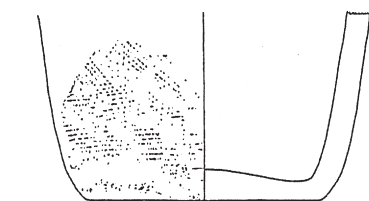
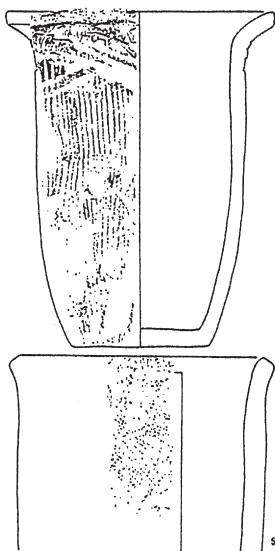
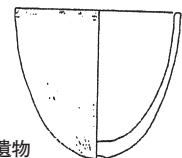


高坏



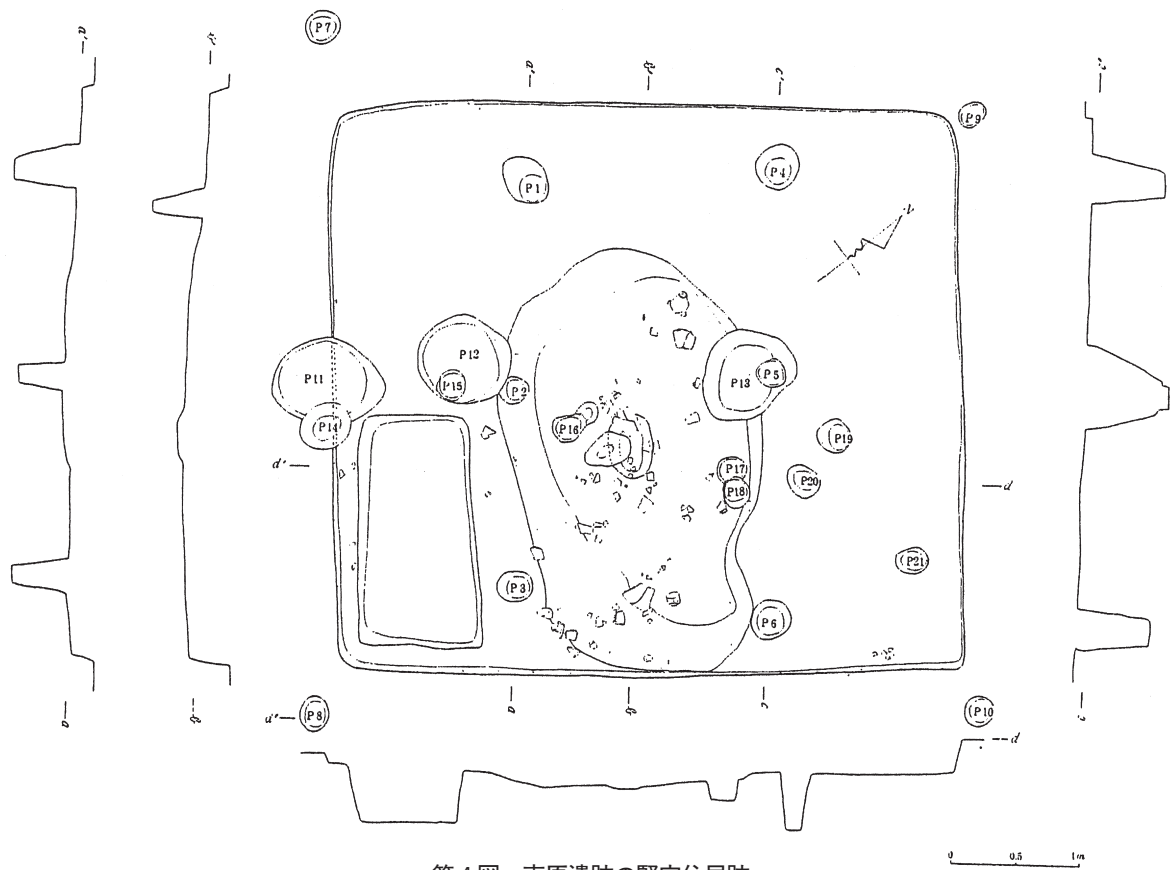
埴

竪穴住居跡の出土遺物

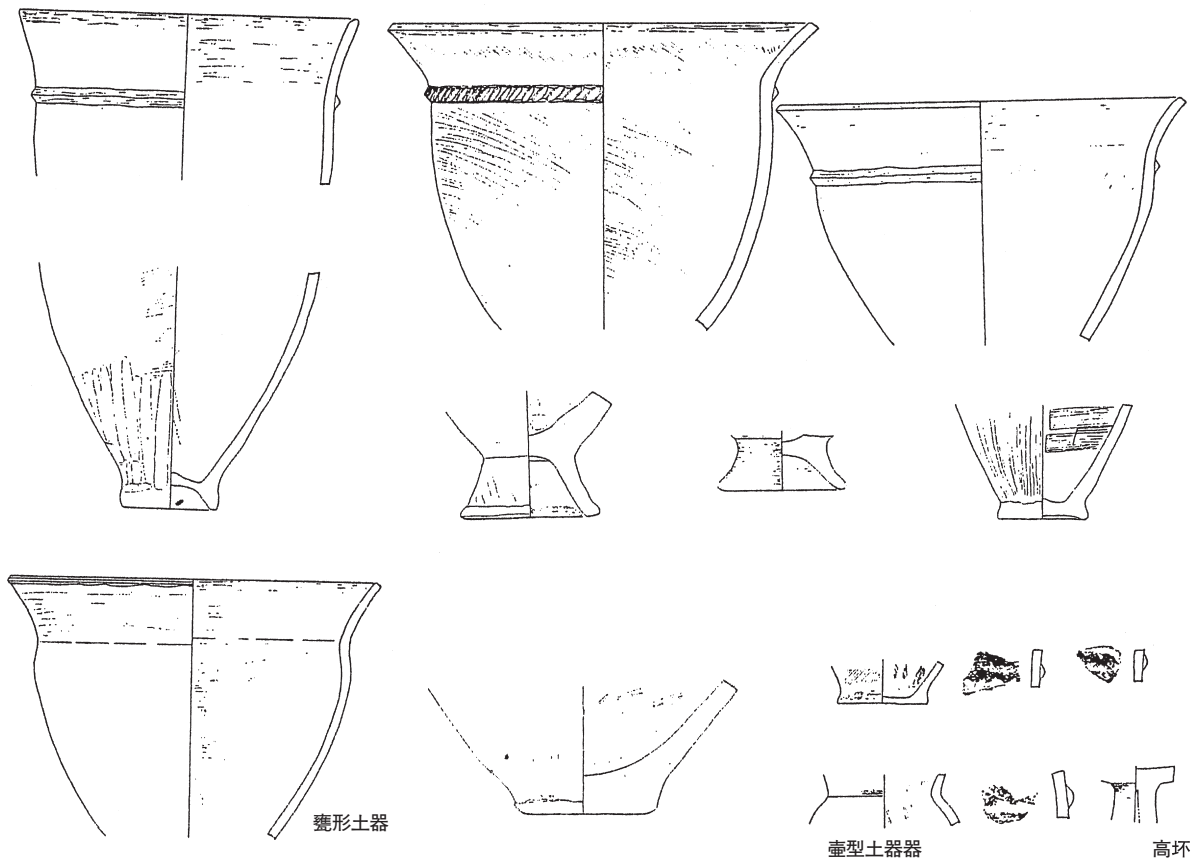


石坂式土器

第3図 東原遺跡の出土遺物(1) 縄文土器と竪穴住居跡の土器



第4図 東原遺跡の竪穴住居跡



甕形土器

壺型土器器

高坏

第5図 東原遺跡の竪穴住居跡の出土土器